町長ひとりごと ㉗

斉藤 譲

春うらら

今年は、いつになく春の訪れが早い。道端や土手の日溜りには、いぬふぐりやはこべなどの小さな可憐な花が、柴や白い絨毯を敷き、わが家の猫の額ほどの庭にも、春は足音高くやってきて、疎な草木に赤や黄色の鮮かな花を咲かせている。時折、うぐいすの囀りが、弥生三月の春霞の空にこだまし、山里は早くも春うららである。町長室に飾られる花も、温室育ちの切り花から、庭先に咲く水仙や白蓮、雪柳にかわり、春の彩りと香りを漂わせている。

最近はじめた、庁舎内のBGM放送の快いメロディーや、役場の主のハト達が群飛ぶ力強い羽音を聞いていると、いつしか私の心も春うららになってくる。

今年は、昭和天皇の崩御にはじまって、大小様ざまな行事が催され、その間に新年度予算の編成や、町議会をはじめ数々の会議が重なったり、町内外の葬祭やらで、息つく暇がないほど多忙な日々が続いている。健康だけが取得の私ではあるが、此の頃いささか疲労を感じていた。けれども、自然が運んできた春の恵が、こんな私の心や体の疲れを、穏やかに癒してくれるような心地がする。いま、自分は、自然の大きな懐に抱かれているという実感が、無上に心のやすらぎと充実感を与えてくれるのである。自然は、人間のように感情を持つこともなく、またこれに支配されることもない。しかし、自然は四季の移ろいとともに、躍動、苛烈、感傷、峻厳とでもいえるほど、鮮明にその姿を変える。自然の無窮の営みを思い、その偉大さに感動するとき、人間は神が支配する大自然の中で、生かしていただいているのだという謙虚な気持ちが満ちてくる。自然と対面すれば、湖面にたつさざ波のような心の乱れが、鏡のように澄みきってくるから不思議である。

物質文明の発達は、いつしか人間から、自然を愛し、敬う心を奪いとってしまったようだ。現代人は、いま科学技術の進歩によって、あたかも自然を克服し、支配できるかの如き錯覚に慢心し、身勝手で無秩序な自然破壊をくり返している。何と愚なことであろうか。所詮、人間の知恵がつくりだした文明や文化は、大自然の偉大さからみれば、限りなく小さくそして軽い。無限な自然の慈を忘れ、狭く雑多な社会の中で、我欲をむき出しにしたり、たわい無いことでいがみあう人間の姿ほど醜く、軽薄なものはない。きっと、自然を支配する神の目からみれば、それは塵芥以外の何物でもあるまい。

いま、やわらかに降りそそぐ春の日差は、私達人間に「自然の中で生かされている恩恵を思い知れ」と問いかけているようである。春ののどかさは、冬の厳しさをくぐり抜けることによって強調され、春の花の清清しさと艶やかさは、くすんだ冬枯れの残像の中で映える。これと同じように、人間の楽しみや喜びも、苦難や悲しみを乗り越えてこそ得られるものである。私は、結婚式で回ってくる色紙には、極まって「人生は四季の如し」と書くことにしている。この春には、また多くの若者達が、学校や社会へと巣立っていく。ともすれば、これらの若者の中には、厳しい冬を避けて、常に春を追い求めようとする風調があり、残念なことである。こんな彼等こそが、人生の敗者、社会の落伍者となっていくことは間違いあるまい。こんな情ない姿をみるにつけ、思い出されるのは、佐藤一齋が、言志晩録で語る「三学」のことである。

少くして学べば壮にして爲すあり。

壮にして学べば老いて衰えず。

老いて学べば死して朽ちず。

この「三学」の実践こそ、忍耐と精進努力の厳しい冬の季節である。

然れば、この先にはきっと、春の麗が待っている。